

地理学コース

教育学コース

先生に聞いた!

地理学コースとは

大学で行なう地理学の研究は、高校で地理を履修しないと研究できないわけではありません。もちろん、地理的・空間的知識を高校で身につけるに越したことはないですが、そうでなくとも問題はあります。大学での地理学は人間と環境の関係を考えます。この場合の環境とは自然環境だけでなく社会環境、人文環境などが含まれます。つまり、そのような事象でも地理学の研究対象になります。地理学

東南アジアにおける資源利用と問題(祖田先生)



地理学コース 教授 祖田亮次先生

私は東南アジアにおける資源利用についての研究を行なっています。例えば、マレーシア・サラワク州では一九七〇年頃から日本などに木材を輸出するための森林伐採を行なってきました。その影響で森林が減少し、国際的困難を浴びたことから、最近ではプランテーションという形でアブラヤシを植え、パーム油輸出による外貨獲得を行なうようになりました。プランテーションは一見土地の有効活用を行なっているように見えますが、実際は現地住民の土地の収奪、農業・肥料による河川の水質汚濁、外国人労働力の流入など様々な問題が起きている。日本にサラワク州の現状を紹介する意味でも今の研究を行なっています。サラワク州での研究を始めたきっかけは偶然の重なりで

地理学コース3年生 龍口都さん



教室の教員が研究している内容は、都市の住宅問題や貧困問題、感染症の伝播パターン、沖縄の基地問題、東南アジアの資源利用などです。基本的に地理学では研究できない対象はないので、何か一つでも関心のあることがあればぜひ地理学コースに来てください。

オススメの人

私のオススメの研究者は、本学教授の山崎孝史先生です。政治地理・沖縄研究を専門に研究されています。先生が書かれた『政治・空間・場所-政治の地理学-』(ナカニシヤ出版)と、一部を執筆された『人文地理学への招待』(ミネルヴァ書房)は、地理学という学問についてこれから知りたいという方にぴったりの入門書です。ぜひ一読ください!

卒論

- ▼日本で暮らす日本人ムスリマのコミュニティの特徴
- ▼地域ブランドにおける地名選択と生産過程における空間スケール
- ▼地理的犯罪データ分析の防犯活動への活用可能性

地理学コースにとって「流行」とは?

学問にも流行があります。かつては欧米の流行をいち早く読みこなし、日本に紹介するだけで学界の寵児になり得た時代もありました。今はそれほどでもありませんが、少なくとも地理学に関しては、理論的にはまだ欧米の潮流に十年遅れているという感じがします。かといって、欧米で流行していることを紹介しても、それが有益な作業になるとは限りません。最近では流行り廃りが激しくて、最新の理論を紹介しても日本で浸透する頃には欧米では消え去っているというところもしばしばです。日本人(日本の地理学者)は現場の調査は緻密にやるけど、それを分析・考察し、理論化するのには不得手だと言われます。逆に欧米では、同じような「ネタ」でも、新しい視点や概念、理屈で解釈しなおすことに躍起で、「〇〇論的転回」とか「〇〇主義地理学」という言葉にあふれています。学問の新潮流を場合によって無理やり、創り出そうとする行為や、流行に後れないよう必死に追いかける努力は、学問的に重要な作業ですが、ときに滑稽に映ることもあります。学問の流行って何なのでしょう。(文・祖田先生)

祖田先生の研究内容

私は東南アジアにおける資源利用についての研究を行なっています。例えば、マレーシア・サラワク州では一九七〇年頃から日本などに木材を輸出するための森林伐採を行なってきました。その影響で森林が減少し、国際的困難を浴びたことから、最近ではプランテーションという形でアブラヤシを植え、パーム油輸出による外貨獲得を行なうようになりました。プランテーションは一見土地の有効活用を行なっているように見えますが、実際は現地住民の土地の収奪、農業・肥料による河川の水質汚濁、外国人労働力の流入など様々な問題が起きている。日本にサラワク州の現状を紹介する意味でも今の研究を行なっています。サラワク州での研究を始めたきっかけは偶然の重なりで

オススメの人

寺田真彦

著名な物理学者で災害研究者でもありました。湯呑から立ち昇る湯気を見ながら大気の流れを考えるような人です。大地震の揺れに脅えながら、その詳細記録を残すような人です。論理を重視する科学者であり、自分の目で物事を見極めようとするフィールドワーカーでもあり、かつ気の利いた文章を書く随筆家でもありました。

コースに入ってきたきっかけ

大学に入ってから人間行動学科のコースに興味を持っていました。ガイダンスや先輩の話を聞いていくうちに土地ごとに存在する文化に興味をもち、地理学コースを選択しました。これに加えて、私自身、行動的ではないけれど、フィールドワークなどの授業に魅力を感じたのも選択した理由です。

学生から見たコース

授業ではグループを作って一つの論文を書き上げたり、調査する地域に泊まって調査したりしています。主な行事は巡検(実地調査)、卒業発表会と少ないですが、フィールドワークや学部生室で、教員や先輩が気にかけてくれるので、気軽に話しかけたり、相談したりすることができ、そのために、教員・先輩・後輩関係なく距離が近いです。

先生に聞いた!

教育学コースとは

教育学は学ぶ、教える、成長するといふ営みを幅広く対象としている学問です。高校生にとっては、日々の身近な営みであるがゆえに、若干イメージしづらい学問かもしれません。また、「教育学」は教師になる人のためのものだと思う方もいらっしゃいますが、そうとは限りません。学ぶ、教える、成長することは学校に限った話ではありませんし、普段の生活のなかで人とかかわる中にも、そうした営みが埋め込まれています。

島田先生の研究内容

私は、新しい教育方法やカリキュラムが学校現場のなかで定着・普及していくプロセスや要因について研究しています。例えば、「総合的な学習の時間」が導入された当初、その内容の構成や教科との関連性などについて、様々な試行錯誤がなされてきました。そうした学校現場における「実践化」に伴う課題をどのように解決していくことができるのかという点に関心を寄せています。「総合的な学習の時間」は、私が大学院に進学した二〇〇二年度から、小・中学校で全面実施となりました。当時、大阪府下の小学校での実践に触れる中で、学校現場において教師が新しい教育方法やカリキュラムを生み出す営みに興味をもつようになり、研究を続けています。最近では、防災教育やキヤ

学校はもろもろのこと、家庭や地域など、ありとあらゆる場所に、教育という営みは存在しています。普段の生活のなかで教育という営みがどのように展開されているのか、少しでも興味や疑問を抱いた方には、ぜひ教育学を学んでもらいたいと思います。

教育学コース3年生 吉田愛さん



オススメの人

私のオススメの人はマリア・モンテッソーリという幼児教育者です。彼女は経験に基づいた学びを重要視し、使いながら質量や数量の感覚を養えるような教具(教材)を開発しました。大人は子どもの知的好奇心が自発的に現われるよう手助けするべきだという彼女の理論は、学校や家庭など全ての教育に通じる考え方だと思います。

卒論

- ▼公立幼稚園における預かり保育の位置づけに関する考察
- ▼「がんばる力」を形成する保育者の働きかけ-幼児期の達成行動を考察して-
- ▼子どもの「関係の貧困」と教員の役割

オススメの人

レフ・セミョノヴィチ・ヴィゴツキーは「心理学のモーツァルト」と称されている人物です。近年、「人が他者とともに学ぶ」ことへの注目が高まる中で、彼が示した「発達最近接領域」という考え方は、教育学に大きな影響を与えました。他者とともに学ぶことの意味は何か…興味がある方は、ぜひヴィゴツキーの著書を手にしてもらいたいと思います。

新たな教育方法が学校現場に定着していく過程とは? (島田先生)



教育学コース 准教授 島田希先生

教育学の授業では、大阪市内にある小学校の様子を観察したり、グループを作って学生や先生に対して授業形式で授業を行ったりしています。教室行事は多く、2年生向けの歓迎会、春レクリエーション、教室旅行、送別会などがあります。行事が多いため、同期の学生だけでなく教員・先輩・後輩関係なく距離がとて近いです。

学生から見たコース

教育学の授業では、大阪市内にある小学校の様子を観察したり、グループを作って学生や先生に対して授業形式で授業を行ったりしています。教室行事は多く、2年生向けの歓迎会、春レクリエーション、教室旅行、送別会などがあります。行事が多いため、同期の学生だけでなく教員・先輩・後輩関係なく距離がとて近いです。

教育学コースにとって「流行」とは?

学問にも流行があります。かつては欧米の流行をいち早く読みこなし、日本に紹介するだけで学界の寵児になり得た時代もありました。今はそれほどでもありませんが、少なくとも地理学に関しては、理論的にはまだ欧米の潮流に十年遅れているという感じがします。かといって、欧米で流行していることを紹介しても、それが有益な作業になるとは限りません。最近では流行り廃りが激しくて、最新の理論を紹介しても日本で浸透する頃には欧米では消え去っているというところもしばしばです。日本人(日本の地理学者)は現場の調査は緻密にやるけど、それを分析・考察し、理論化するのには不得手だと言われます。逆に欧米では、同じような「ネタ」でも、新しい視点や概念、理屈で解釈しなおすことに躍起で、「〇〇論的転回」とか「〇〇主義地理学」という言葉にあふれています。学問の新潮流を場合によって無理やり、創り出そうとする行為や、流行に後れないよう必死に追いかける努力は、学問的に重要な作業ですが、ときに滑稽に映ることもあります。学問の流行って何なのでしょう。(文・島田先生)